

徳の意味

——トマス・アキナスのハビトゥス理論における倫理的徳の形成と意志的行為——

別宮幸徳

序

トマスは『神学大全』第2部において、徳に関する論述にきわめて大きな分量を割いており、その関心の高さと、徳論が彼の思想において占める重みは一見して明らかと言えるだろう。また執筆されたのは、数多くの註解書や定期討論集などが書かれた最も円熟した時期であり、第3部のキリスト論とともに、第2部の徳論はトマスの思想の総決算と言えるかもしれない。しかし他方では、トマスの徳論は必ずしも見通しが効くものとは言い難いようにも思われる。その理由は、一つには、行為は個別に関わるものなので¹⁾、徳に関する記述も個々の特殊な場合が多くなるためであろう。しかしまた、『神学大全』第2部の1におけるハビトゥスおよび徳一般に関する論述において、見かけの分量ほどには徳の本質が詳細に語られてはいないこともまたその原因となっているように思われる。と言うのも、徳についてのさまざまな哲学的伝統は綿密に参照され吟味されてはいるが、徳と能力との関係について、とりわけ徳が能力に及ぼす影響がどうして可能になっているのか、そして徳と能力の間のどのような相互作用によって、徳に基づいた行為が成立するかについて、能力と徳の一般的规定を越えて、能力の実際の活動様態に即して語られることはあまりないように思われるからである。

そこで本稿では、トマスが『神学大全』第2部、および定期討論集『徳一般について』『愛徳について』『悪について』などの後期の著作で論じている徳論において、徳による能力の形成と能力の活動との関係がどのように考えられるかに関して、一つの解釈を試みることにしたい。その際特に、欲求能力に形成される倫理的徳が欲求能力に及ぼす影響が、意志の自由裁量に反するように見える点を、トマスの行為論から理解することによって、両者が両立し得るものであることを示すことを課題としたい。

全体の構成としては、まずトマスによる徳の一般的定義を跡づけ、そこから倫理的徳の特性と意志の自由裁量が一見すると相反する点を指摘する。次に、徳形成の前提となる意志的行為の構造を概観し、欲求能力に形成される徳の本性を意志の活動から捉えた上で、最後にいったん形成された徳がどのような影響を意志能力に与えるかについて明らかにしたい。しかし、自由な行為は理性的能力である知性と意志、および感覚的能力が相互に関係し合って成立する非常に複雑なものであるため、ここではそのすべてに立ち入ることはできない。したがってここでは、倫理的徳の形成に直接関係する限りで、意志的行為の構造の輪郭を素描するにとどめることとし、また能力についても、感覚的能力が理性的能力によって支配されることから²⁾、理性的認識能力と理性的欲求能力である知性と意志にのみ絞ることとしたい。

1 徳の本質規定

さて、徳は善きハビトゥスとして、なんらかの意味で理性的な性格を持つ能力を完成するものなので、徳の本質規定は、ハビトゥスと、ハビトゥスが形成される能力から考えられる。そこでまず、理性的能力に形成されるハビトゥスの特徴と、ハビトゥスが能力に及ぼす影響一般をトマスにしたがって概括してみたい。

トマスの定義では、ハビトゥスは容易には変化しない秩序づけ *dispositio* として、それが内在する基体を付帯的な存在様態に関して規定し、そのハビトゥスが基体の本性に適合する場合には基体を善い状態に、適合しない場合には悪い状態にするものである³⁾。このように本性との関係において、ハビトゥスがその基体に付帯的な秩序をもたらす限りでは、ハビトゥスはある種の現実態性と言うことができる。さらに基体の本性の活動への関係性からハビトゥスを捉えるならば、つまりハビトゥスを能力に内属するものとして見るならば、ハビトゥスは本来的に行為の方向づけをもたらすものとなる⁴⁾。こうした能力のハビトゥスは、行為の対象から規定される付帯形相として能力に内在し、そのことによって能力を現実態化して、能力にそのハビトゥスを形成した行為の対象への適合性をもたらす⁵⁾。その結果、同じ対象に対する行為が反復される場合には、そのハビトゥスが能力を完成するものならば、ハビトゥスはその行為をより容易かつ完全にする⁶⁾。すなわち能力の完成とは、その現実態、つまりその能力の活動である故に、ハビトゥスは能力をその行為に適したものとすることで能力を完成すると言えるのである⁷⁾。その一つの例として、例えば楽器の演奏に習熟する

ことが挙げられよう。したがってハビトゥスには、主体の完成としての側面と、行為の原理としての側面の二重的な性格があることになる。

このようにハビトゥスが行為を通じて獲得されることは、人間の有限的な理性的能力に特有のものだが⁹⁾、それは以下のような理由によっている。非質料的な理性的能力である知性と意志は、存在するもの一般に対して未規定のまま普遍的に開かれ、あらかじめ特定の対象に確定されていない。すなわち知性と意志は、存在するものである限りの存在するものを対象とし、その対象の形相において、知性にとっての真、意志にとっての善という観点の下で関わるのであり得るのである⁹⁾。しかし知性と意志はこうした無限性を持つ反面、トマスがしばしば第一質料になぞらえているように¹⁰⁾、それ自身としては個々の活動に関して可能態にある。一般に、ある活動について可能態にあるものが自己自身を現実態化することはできず、実際に活動が成立するためには、現実態化するものが不可欠となる¹¹⁾。だが他方では、行為の対象は存在するもの一般としての普遍者ではなく、さしあたり現実態において端的に存在しているもの、すなわち世界内の質料的実体であって、それは類種的に相互に区別される個別的かつ多数的なものであり、主体は感覚的能力を通してそれらと関わる。したがって理性的能力の活動が成立するためには、多数の内の特定の対象に確定される必要があることになる¹²⁾。しかしそれは対象側からはなし得ないので¹³⁾、活動を成立させるのは主体側から、すなわち理性的能力自身が自らを特定の対象へと能動的に関係づけることによるのでなければならない。このように能動性と受動性を合わせ持つ能力、特に意志を、トマスは「動かし動かされる *movens motum*」能力¹⁴⁾と呼んでいるが、こうした純粋な受動性と純粋な能動性の中間にあり、対象へと未規定的に開かれている能力が現実活動するとき、遂行される行為が対象から規定されるだけでなく、行為の原理である能力そのものの内にも、特定の対象への秩序づけとして付帯的な形相が形成される。これがハビトゥスであって、ハビトゥスが形成される結果、能力自身もまた、その対象に適合した特殊な存在様態へもたらされるのである。

このように特定の対象への適合性が増すことは次のような理由による。理性的能力はその未規定性と可能態性の故に、行為が全く行なわれない状態では、どの対象から現実態化されることにも可能的に適している。したがって、能力が特定の対象に対して現実態化されるならば、その対象とは対立する別の対象への現実態化の、可能的な適合性がより減ぜられることになり¹⁵⁾、その結果、理性的能力に固有な対象一般への

開放性は変わらず持ちながらも、特定の対象に対する行為により適した状態となる。それゆえ、その対象に対する行為が反復されるならば、必然的にハビトゥスが形成されることになる。

それでは、ハビトゥスによって特定の対象に対し、より現実態化された能力が、その対象による行為に適合性を持つということは、どのようなことを意味するのであろうか。ハビトゥスは、理性的能力である知性と意志、及び知性に支配される限りでの感覚的能力に形成されるが、付帯形相としてのハビトゥスの特性は、その基体となる能力の特徴に応じて異なった様相にある¹⁶⁾。すなわち、ハビトゥスは基体となる能力に応じて種別化され、同じ能力に対する中でも、能力の本性に適合し、能力を完成するハビトゥスは他のハビトゥスと区別されて徳 *virtus* と呼ばれるのである¹⁷⁾。

知性を完成する徳としては、例えば文法の知識があげられる。文法の知識を持った人は、文法的に正しく話す技能 *facultas* を身につけており、その意味で文法に正しく話すという行為への適合性を知性の内に形成している。したがって必要があればすぐに文法的にふさわしく話すことができるが、しかし同時に、文法の知識を持っている人は、意図すれば文法的に正しくない語り方をすることもつねに可能である。それゆえ文法の知識という知性的徳 *virtus intellectualis* は、その徳に基づいた行為への技能を知性に与え、その限りで能力としての知性を完成するものではあるが、しかしそれだけではその正しい行使までを保障するものではない。トマスは、知性的徳がこのように能力の正しい行使を保障しない故に、本来的な意味での徳とは見なしていない¹⁸⁾。

これに対して、理性的欲求能力としての意志を完成する徳である倫理的徳 *virtus moralis* の場合には、知性的徳とは異なり、行為への技能だけでなく、能力の正しい行使をももたらす。これは意志が、意志自身を含む主体のあらゆる能力の作用因の原理として、能力をその遂行にまで導く力を持っていることによって¹⁹⁾。意志の固有の対象は善一般であり、そのもとには意志自身や知性を含む主体の能力と、それらの能力の活動およびその対象が個別的な善として含まれるため、意志に特定の対象への徳が形成され、認識によってその対象が意志に媒介されるならば、意志はその対象をつねに目差し、自らと他の能力をその対象の遂行へと動かす²⁰⁾。つまり、意志に特定の対象への徳が形成されることによって、意志は潜在的な仕方であつねにその対象を欲求することになるのである。それゆえ、正しい人とは、単に正しい行為が可能であ

るというだけでなく、つねに正しく行為する人のことを言うのであり、それはまさしく徳に基づく善き意志を持つからに他ならない²¹⁾。

このようにトマスは倫理的徳の本質として、能力をつねに同じ対象へと傾向づけることを挙げているが、他方、意志は倫理的徳に強制されて、必然的にその対象を欲求するのではないということも明言している。すなわち、「徳もしくは悪徳のハビトゥスは、ハビトゥスによる規定に反してはたらくことができないような仕方、必然的に意志を傾けるのではなく、意志は、そこへとハビトゥスが傾けるものに反してはたらくことが困難になる」²²⁾ようなものなのである。それでは、この一見したところ両立し難いトマスの見解はどのように理解すればよいのだろうか。この点についてトマスは、理性的能力が自らの行為の主 *domina sui actus* として自由裁量を持つため、ハビトゥスないし徳によって必然的に欲求することにはならないという説明を与えているが²³⁾、これだけではなぜそうなのかということは明らかとは言い難い。また、意志が主体の能力の中で最上位の作用因的原理であるため、意志は、欲するならば自らの内に形成されているハビトゥスを使用する *uti* ことができるというトマスの言葉²⁴⁾の意味するところも、さらに問われるべきであろう。ところで、いかなるものもその本質はそのものの原理から規定されるので、意志が倫理的徳によってつねに特定の対象へ傾向づけられながらも、必然的にその対象を欲求するのではないというこのアポリアも、倫理的徳の原理となるところからより根本的に理解することが期待できる。倫理的徳は意志と、意志に支配される欲求能力の活動によって形成されるものなので、次にこうした倫理的徳の特徴を、その形成過程を辿ることによって、すなわち意志能力の特徴と、意志的行為の成立構造の中から考えてみることにしたい。しかし、冒頭にも述べたように、意志的行為の成立過程は知性と意志が相互に絡み合う複雑なものなので、ここでは倫理的徳の形成に直接関係する限りで、その輪郭を示すことだけにとどめざるを得ない。そこで、以下でまず、対象による意志の最初の現実態化である愛を取り上げて、意志の欲求活動がどのように対象から規定されるかを見た上で、次に意志が対象を実際の行為の目的として欲求する際の知性と意志の役割を見届け、さらに目的志向における意志のはたらきから、意志自身がどのような影響を受け、倫理的徳がどのようなものとして形成されるかを跡づけていくことにしたい。

2 行為の構造と徳の形成

1) 善による意志の現実態化と意志の最初の対象肯定としての愛

さて、意志の欲求活動の対象として行為の原理となるものは善だが、いかなる外的な行為にも先立って、善はまず意志自身において内的に肯定される。意志は、根源的にはあらゆる対象をなんらかの意味において存在するものである限り善として肯定するが²⁵⁾、これには、実体的な存在者に限らず、概念的な善や、仮象としての善²⁶⁾まで含まれる。この意志における善の肯定は、その後のあらゆる意志の行為に先立ち、それらの内的な原動力となりながら²⁷⁾、それ自身はまだ直接に志向的な目的追求ではない意志の最初の行為であり、これをトマスは愛と呼んでいる²⁸⁾。意志は個別的な対象に対しては可能態にある能力であり、能動的な活動に入るためには、最初に対象である善によって現実態化されなければならないので、この意志の最初の活動としての愛は、根源的には受動的なものである。

さて、どのような欲求が成り立つ場合にも、欲求の対象の認識が前提されるので、善はまず知性認識されることを通して、自らを意志に対して顕し、それによって善に対する最初の肯定である喜び *complacentia* を意志自身の内に呼び起こして²⁹⁾、善の持つ完全性の中へと意志の肯定を与らせる。こうした善に対する根源的な肯定である愛により、愛の対象である善は意志の内に、トマスの表現では、善に対する「親和性 *connaturalitas*」³⁰⁾、「適合性 *aptitudo*」³¹⁾、「比例性 *proportio*」³²⁾を形成する。しかしこれは作用因的な影響関係ではなく、善によって呼び起こされた意志が、自発的に自らを善の肯定へと関わらせることによる。つまり、意志の最初の行為としての愛とは、対象となる善を肯定する意志の内的で自発的な活動なのである³³⁾。

こうした意志の脱自的な性格³⁴⁾。能力としての意志が、知性能力の特質とは対照をなしていることによる。認識活動の完成は、認識されるものが知性の内に、認識者の様態において、すなわち非質料的な可知的形象として存在することにあるのに対し、欲求活動の完成は、欲求能力が、固有の存在にあるものとしての対象へと傾き、対象において安らうこと、つまり固有の存在様態にある対象と一致することにある³⁵⁾。換言すれば、知性は対象の本質を主題とし、真の観点 *ratio veri* の下で対象と関わるのに対し、意志は対象の現実態性を主題とし、善の観点 *ratio boni* の下で対象と関わる³⁶⁾。なぜなら、端的に善と言えるものは、単に本質において捉えられたものでは

なく、現実態において存在するものであるからなのである³⁷⁾。

しかし、意志のこのような脱自的な性格は、意志が単に外へと流出し、外的なものの中に自らを失ってしまうことを意味するのではない。反対に、こうした特徴は、意志が知性に対比して、より受容的であることに基づいている³⁸⁾。つまり、固有の存在における対象を目差し、それとの一致を求めるということは、反面から言えば、主体が意志において自らを開き、対象に、自己自身の中心へと関わらせることを意味するのである。したがって、対象の肯定がさらに進展し、欲求における行為の対象として志向される場合には、意志は自らの存在を対象によって形成せしめると言うことができる。それゆえ、意志は愛において、愛の対象を、それへの傾向性として自らの内に分有する³⁹⁾。つまり、善としての対象は、愛において非対象的に意志に現前していると言うことができるのである。これは、意志が理性的能力として非質料的な様態にあるので、知性とは違った形で、対象の自立性を廃棄しないまま、対象とある意味で一致することが可能であることによる。トマスは、欲求能力である意志は、対象の認識に関しては全面的に知性に依存するので、意志の活動は知性認識された対象の形相に基づき、意志そのものの内には、対象の形象は存在しないとしているが⁴⁰⁾、しかしこれは、意志が自らを超えて、より動的に固有の存在における対象そのものへと向かい、対象の善性に与るものであることを強調するためであり、主体が意志において対象とある仕方でも一致することを否定するものではない⁴¹⁾。むしろ主体は、欲求能力である意志を通して、善である対象において、自らの完成を見出すと言うことができるのである⁴²⁾。

さてしかし意志の最初の活動である愛は、意志的行為の前提ではあるが、未だ行為に至る前の段階である。対象が行為の原理となる場合には、すなわち行為の近接目的となる場合には、意志はこうした意志の最初の活動である愛による一般的な肯定を越えて、さらに自らにとってふさわしいものとしてより深く肯定する⁴³⁾。そして、欲求能力におけるハビトゥスは、まさにこの善が目的として目差されることによって、換言すれば、意志が特定の対象を自らにとっての目的として欲求することによって獲得されるので、意志の目的志向が、欲求能力において倫理的徳が形成される場面となる。なぜなら、個別的对象を欲求することは、意志がその対象によって自らを形成することを意味するのであり、したがって意志そのものの存在様態を特殊化することにはほかならないからなのである。そこで次に、この意志による目的志向の構造を見ること

にしたい。

2) 目的志向の構造

意志が対象を一般的に肯定することから、さらに行為の原理である目的とする際には、意志は対象を自らにとってふさわしいものとしてより深く肯定するが、こうした意志自身に適合するという善の理解は、意志によるのではなく、行為に関わり欲求の規範的原理となる実践理性の認識によってもたらされる⁴⁴⁾。この適合性の認識によって、意志にふさわしい対象としての善が提示され、意志は対象を自らにとっての善として欲求することができる。善は、その本性から目的としての性格を持つが、意志がある対象を自らにとっての目的として目差すことは、単に対象側から受動的に影響を蒙るのではない。この点に関してトマスは、『真理論』などにおける前期の著作での見解を、後期の著作である『悪について』および『神学大全』第2部において修正している。『真理論』では、実践理性によって善が認識され、意志に提示されることによって、意志は対象である善から直接に目的因的な影響を受けるとされていた⁴⁵⁾。この観点に立てば、意志は理性に対して従属的な能力となり、目的志向に関しては、実践理性の目的認識に全面的に依存することになる。すなわち、目差すべき目的として対象が認識されたならば、その限りで意志は必然的にその対象を欲求することになるのである。これに対しトマスは、『悪について』および『神学大全』第2部において、行為が成立する際の知性の役割を、意志の対象による種別化、つまり意志の形相因的形成だけに関わるものと見ている。すなわち、知性が意志に対して対象を「提示する *praesentare*」ことによって、意志はどの対象を目差すかという点については対象側から規定されるが、その対象を実際に欲求するかしないかは、対象側からは、したがって知性によっては決定されず、その決定は意志自身によるのである⁴⁶⁾。つまり、意志がその対象を目的として欲求する場合には、意志は自己自身を対象へと動かすことになる⁴⁷⁾。これは、個別的な対象に関して可能態にある意志が、その対象へと自己自身を現実態化することになるが、しかし意志は全くの可能態にあるのではない。意志は、根源的には究極目的への志向によって作用因的能力として現実態化されているので、任意の個別的な対象に関して自己を現実態化すること、つまりその対象を近接目的として欲求することができるのである。前述の後期の著作における、意志の自発性ないし能動性の強調はきわめて明確である。もし対象として、考えられる限りのあらゆる完全性を備えた善、すなわち至福 *beatitudo* が提示された場合でも、行為の

対象への確定という点では、必然的にその対象を、つまり至福を欲求することになるが、しかしこの必然性は対象面での確定にとどまるのであって、実際に欲求するかしないかという行為の遂行に関しては、必然的ではないとさえ言われるのである⁴⁹⁾。なぜなら、たとえ対象として至福が包括的なものであり、それ以外に欲求し得るものがないにもかかわらず、至福を欲求するという意志の活動自体は個別的なものであり、そうした活動を意志が自ら欲求しないでもできるということは、至福以外の個別的な対象の場合と全く同様だからなのである⁴⁹⁾。

以上のことから、意志の活動が二重の規定を受けることがわかる。一つは対象側からのものであって、知性認識によって対象が媒介されることにより、意志の欲求活動はその対象によって種別化され、形相因的に形成される側面であり、もう一つは、意志自身による、対象に関しての意志の作用因的な自己現実態化という側面である。トマスは、特にこの意志が自らを動かすということを、認識能力を持った存在者に固有の、本来的な目的志向と見なしている⁵⁰⁾。

さてしかしながら、ここで一つの困難な事態が浮上して来る。対象を欲求する際の意志の自発性が確保され、対象側からの影響は形相因的なものに限定されるならば、対象からの目的因的な影響はどのように考えられるべきなのだろうか。換言すれば、こうした対象側からの種別化による意志の受動的形成と、意志自身による能動的な自己現実態化という二つの方向性はどのように統一されるのだろうか。なぜなら、実際に行為を遂行する際には、対象は近接目的として志向されているので、対象からの目的因的な影響も受けている筈だからである。確かに、対象が近接目的として目差されることは、すでに前提されているより上位の目的志向によって、そして根源的には究極目的への志向によって可能となっているが、このことは、二次的なものではあっても、対象が目的としての性格を持つことを排除するわけではない。すなわち、同じ一つの行為において、意志の自発性と、対象からの目的因的影響が、どのように両立し得るかが問題となるのである。

この意志の目的との関係は、単に外的なものではない。作用因的な能力としての意志は単なる衝動ではなく、知性認識された目的を原理として欲求活動を行い、この目的欲求に基づいて、目的へ至る手だて *ea quae sunt ad finem* としての外的対象が目差される⁵¹⁾。意志は、目的にすでに達している場合にはそこに安らぐ *quiescere* 活動、つまり志向的でない活動となり、そうでない場合に志向的にその目的を目差す

intendere⁵²⁾。したがって意志の活動は、単に主体の外へ向けて直線的に発する志向的力というよりも、本質的には認識された目的を原理としてそれを肯定する欲求活動なのであり、意志と目的との疎隔を意味する志向性は、意志の欲求活動の本質からはむしろ派生的なものとも言えるだろう。また、意志の固有の対象である目的も単に外的なものなのではなく、たとえそれが到達されていない場合であっても、知性に認識されることによって志向的な仕方では主体に内在し、そのことによって意志の能動性の内的な原理となる。目的はそこへと行為が目差される終極 terminus であるとともに、まさにそのように目差されるべきものとして、行為者自身の内で始源 principium となり、そこから意志の能動性が発する能動的原理として、現実には目的が到達される以前に、欲求活動の最初から機能しているのである⁵³⁾。ここから明らかになることは、目的は意志とは区別され、行為の原理としての優位を保ちながらも⁵⁴⁾、単に物理的に主体の外にある外的な原理なのではなく、むしろ主体側の内的原理として位置づけられるということである。したがって意志的行為においては、目的との関係で意志の欲求活動自体が能動・受動の二重性によって内的に構成されているのであり、目的因性と作用因性の統一の根拠を問うことは、意志の欲求活動の成り立ちそのものを問うことになるのである。

このような二つの側面を同時に可能にするような目的志向における意志の行為とは、次のようなものとして解釈できるだろう。すなわち、意志は目的を志向する行為において、対象である善によって、意志の最初の活動として現実態化された自己の活動それ自身を再帰的に肯定する、言い換えれば、意志は、善によって自らが受動的に形成されることそのものを能動的に欲求するのである。したがって、意志が対象を自らの近接目的として志向するとき、意志は真に自己自身を形成していると言うことができる。意志がこのように再帰的に自己の活動そのものを欲求することができるのは、意志が知性とならんで非質料的な精神的能力であることによる。質料による制限がないことによって、知性は、外的対象を認識するだけでなく、対象を認識する自己の認識活動そのものをも認識できるように、同様にまた意志も、対象を欲求する自己の欲求活動そのものを欲求することができる⁵⁵⁾。こうした意志の欲求活動の二重性は、知性認識における一次志向と二次志向に並行していると言うことができるだろう。また、知性と意志は自己の活動に再帰的に関わるだけでなく、互いの活動に関わることもできる。すなわち、知性は、意志が欲求することを認識し、意志は知性が認識すること

を欲求する⁵⁶⁾。このようにして、知性と意志の相互媒介と自己自身への再帰的關係が、目的志向における主体側の可能根拠となっているのである。

3) 行為における倫理的徳の形成と意志への影響

以上、自由な行為の成立構造を概観してきたが、それでは最初に提示された問題、すなわち、倫理的徳が形成されることによって、意志は特定の対象へと傾向づけられ、潜在的につねに同じ対象を欲求するのでありながら、他方では意志は必然的にその対象を欲求するのではないというアポリアは、こうした行為の成立過程の中でどのように位置づけ、理解すればよいのだろうか。

ハビトゥスおよび徳は、能力が多数的かつ個別的な対象の内の特定のものに自らの活動を確定させることによって、能力内に形成されるその対象への秩序づけである。したがって行為の構造の中では、意志が対象から受動的に形成されることを能動的に欲求する場面でその対象に対するハビトゥスが形成される。すなわち、意志能力の内に形成されるハビトゥスは、意志の最初の活動である対象への愛なのである。この愛は、上述したように善による意志の最初の現実態化として、意志が受動的に形成されるものであると同時に、意志の自発的な対象への肯定でもある。つまり、対象への愛であるハビトゥスは、内在形相として意志能力内に存在しつづけることによって、意志をその対象へとつねに傾向づけることになる。したがって、倫理的徳が意志において完全に形成され、その倫理的徳に対立する対象への欲求可能性が克服されるならば、意志はつねに、倫理的徳に基づいて同じ対象を潜在的に欲求することになるのである。

しかし他方では、こういった意志の最初の活動である愛だけではまだ行為が成立しない。なぜなら、目的志向としての行為が成立するためには、愛に基づく意志の対象への傾向性を、意志自身があらためて肯定し、確定するのではなければならないからである。それゆえ、意志にどのようなハビトゥスが形成されていても、行為の遂行に関しては、意志には自己決定力が依然として残されており、そのハビトゥスの対象を目差す行為を、必然的に行ってしまふことにはならない。すなわち、倫理的徳が意志に及ぼす影響は、形相因的なものとして対象面での確定にとどまり、意志の作用因的な自発性には全く影響を及ぼさないのである⁵⁷⁾。このようにして、トマスのハビトゥス理論は根本的に、後期トマスの行為論における自由理解に基づいていると言うことができるのである。

註

- 1) *S.th.* I-II q. 6 introd.
- 2) *S.th.* I q. 81, a. 3 c.
- 3) *S.th.* I-II q. 49, a. 2 c.
- 4) *S.th.* I-II q. 49, a. 3 c.
- 5) *S.th.* I-II q. 54, a. 1 c.
- 6) *Virt. in comm.* q. un. a. 1 c.
- 7) *S.th.* I-II q. 55, a. 1c.
- 8) 行為によって獲得されるのではないハビトゥスである注入徳についてはここでは触れない。
- 9) *S.th.* I 59, a. 2 ad 2.
- 10) *S.th.* I-II q. 50, a. 6 c.
- 11) *S.th.* I q. 79, a. 3 c.
- 12) *Malo* q. 6, a. un. c.
- 13) 知性と意志は普遍的能力であるため、特定の対象にあらかじめ対象側から制限されることはない。
- 14) *S.th.* I-II q. 50, a. 5 ad 2.
- 15) *Malo* q. 2, a. 11c.
- 16) *S.th.* I-II q. 56, a. 2 c.
- 17) *S.th.* I-II q. 55, a. 1 c.
- 18) *S.th.* I-II q. 56, a. 3 c.
- 19) *S.th.* I-II q. 9, a. 1 c.
- 20) *S.th.* I-II q. 9, a. 3 c; q. 9, a. 1 c.
- 21) *Virt. in comm.* q. un. a. 9, ad 16.
- 22) *Malo* q. 3, a. 13 ad 6. habitus virtutis vel vitii non inclinat voluntatem ex necessitate, sic quod aliquis non possit contra rationem habitus operari, sed difficile est operari contra id ad quod habitus inclinat.
- 23) *Virt. in comm.* q. un. a. 1.
- 24) *S.th.* I-II q. 50, a. 5 c.
- 25) *S.th.* I-II q. 8, a. 1 c.
- 26) *S.th.* I-II q. 8, a. 1 c; I q. 105, a. 5 c.
- 27) *S.th.* I q. 36, a. 1 c
- 28) *S.th.* I q. 20, a. 1 c.
- 29) *S.th.* I-II q. 26, a. 2 c.
- 30) *S.th.* I-II q. 27, a. 1.
- 31) *S.th.* I-II q. 25, a. 2 c.

- 32) *Ibid.*
- 33) *S.th.* II-II q. 25, a. 2 c.
- 34) *S.th.* I-II q. 1, a. 1 ad 2.
- 35) *Ver.* q. 22, a. 10 c.
- 36) *S.th.* I q. 59, a. 1 c.
- 37) *S.th.* I q. 5, a. 1 ad 1.
- 38) *S.th.* I-II q. 22, a. 2 ad 2.
- 39) *S.th.* I-II q. 25, a. 2 ad 2.
- 40) *Virt. in comm.* q. un. a. 8 ad 13.
- 41) *S.th.* I q. 37, a. 1; ad 2.
- 42) すなわち目的 *finis* として.
- 43) *Malo* q. 6, a. un. c.
- 44) *Ibid.*
- 45) *Ver.* q. 22, a. 12 c.
- 46) *S.th.* I-II q. 9, a. 1 c; *Malo* q. 6, a. un. c.
- 47) *S.th.* q. 9, a. 3 c.
- 48) *Ibid.*
- 49) *Ibid.*
- 50) *S.th.* I-II q. 1, a. 2 c.
- 51) *S.th.* I q. 19, a. 1 c.
- 52) *S.th.* I-II q. 12, a. 1 ad 4.
- 53) *S.th.* I-II q. 1, a. 3 c.; ad 1.
- 54) *S.th.* I-II q. 1, a. 2 c.
- 55) *S.th.* II-II q. 25, a. 2 c.
- 56) *S.th.* I-II q. 17, a. 1 c.
- 57) しかし知性的徳とは異なって、欲求能力に形成されるハビトゥスは傾向性であり、そのハビトゥスの対象への能動性を伴うものなので、いったんハビトゥスが形成されたならば、またそのハビトゥスが完全であればあるほど、そのハビトゥスに反した行為は知性的徳の場合よりもはるかに困難になる。欲求能力のハビトゥスにしたがわない行為には、実践理性の活動を必要とする。